

大震災から今日で11ヶ月、復興の進みの陰で…

大震災から今日で11ヶ月、時間の経過と共に被災された方々の心のケアが必要になることを予想していたが、最近の報道や番組でもその側面からのものが目につくようになった。

先日もTV番組「東日本大震災11か月～子どもを亡くした親たち～」があり、津波で子どもを亡くした母親たちの深い悲しみと、支え合おうとする自助グループの活動取材したものであった。

母親たちは、「私たちは復興できないものを失ったから、復興、復興という話題の場には居られい…」、「絆、絆と聞くと、絆を紐合うものが切れてしまった私たちは…」と、その苦しみや悲しみを呟やく。

幼い我が子がまだ不明の若い母親は、「子どもに繋がる何もかもが流されたので、せめて小さな小指の小さな骨だけでも帰ってきて欲しい…」と呟く。

自助グループは、大半は母親たちで、津波でわが子を亡くした親たちが月に1度語らう場として仙台で昨年6月末に始まったが、今は石巻市や気仙沼市でも開かれているようで、当初は20人程であったが、今は会員は100人程になっているとか。

幼い子どもが行方不明のままの人もいて、辛い思いを訴え、泣ける場所が日常になかった人も多いようで、自分の本当の苦しみ・悲しみを打ち明けられず、家の中にこもっている人が少なくない中、こうした会の存在が生きる支えになってくれることを切に願う。

心の立ち直りには、苦しき、悲しきを口に出す時期がぜひ必要で、ある母親は海の方に行く気になれなかったが、何度か会に行くことで、ようやく海の方にも行く気になり、笑顔も戻ってきたように自らを語る。

会の主宰者は、「悲しみは決して癒やされることはなく、生きていくには仲間同士、支え合うことが必要だ」と訴えている。

当HPの記事でも時々触れているが、「痛みは辛抱出来ても、悲しみは辛抱出来ない」ので口に出すことが必要なだけに、やはりこうした会で苦しみや悲しみを共有しながら、お互いの胸の内を語り合う場が大事と思う。